

いまなぜ アジア太平洋 Asia Pacific にか
立命館アジア太平洋大学の創設をどうして考えたか

日本の中に「世界」をつくる

私は1980年代後半から、立命館アジア太平洋大（APU）をつくる仕事をしていた。APUは大分県と別府市、学校法人立命館の協力で、別府市に開設した大学で、今年が11年目。学生の半数が留学生といふコンセンサスで構想し、現在約3千人と47・5％を占める。97カ国・地域からの学生に日本語と英語の2本立てで授業が行われていて、設立の準備段階で留学生を求めて中国や韓国、台湾を回ったときに発見したことがある。現地の優秀な学生たちが海外に

長崎大リレー講座 寄稿③

立命館大名誉教授

かずいち 坂本 和一氏

目を向けてきた。必ずしも日本語を勉強してはなかった。むしろハイパー大分スタンフォード大を自国に英語を学んでいく。それを知らず、英語教育のベースがなると駄目だと感じた。APUは1300人の学生を収容できる宿泊施設を持ち、豊富な国際交流施設を備えている。この環境で日本の大学には必要だと感じ、APUの大学として名付けたのか。なせいま「アジア太平洋」なのか。88年にアジア太平洋経済協力会議（APEC）が発足し「アジア太平洋の時代」が来ると言われ始めた。立命館では金学の国際化として、若者が海外に行く「送り出す国際化」に加え、「迎える国際化」を考えた。21世紀はアジア太平洋が世界の中心となる社会論議がなされる。この時代論議を持ち、その認識に基づき、国際的人材養成施設となる大学を、APUと名付けた。APUは「一義的」に「地域」の概念だが、地域を「世界」の「経済共同体」を「グローバル」の「文明」の概念で捉えている。APUは「世界」を「グローバル」の「文明」の概念で捉えている。

の概念。アジア太平洋には地球上の文明の蓄積が集約され、融合を促している。経済、政治、社会、文化も含めた大きな流れが結集している。アジア太平洋が「世界」を引く張るのか、世界中が関心を持っている。日本は今、学生だけでなく、社会や企業も同じき関心が強まっているように思う。内閣府の「はるかなる未来」の中で、世界は「世界」を「グローバル」の「文明」の概念で捉えている。APUは「世界」の「文明」の概念で捉えている。